

レクチャーシリーズ：批評と芸術

第3回「表象の肌理」2024年2月17日（土）15:00～19:00

実施レポート

文＝杉原環樹 | 撮影＝稲口俊太

2024年2月17日、「文化庁アートクリティック事業」における、若手批評家による連続レクチャーシリーズの第3回が開催された。「表象の肌理」と題された最終回の今回は、高嶋慈、塚田優、南島興、村上由鶴の4氏が登壇。それぞれのプレゼンテーションと、全員揃ってのディスカッションが行われた。

京都市立芸術大学芸術資源研究センター研究員で、現代美術と舞台芸術を横断的に批評する高嶋慈氏は、批評家の榎木野衣がキュレーションした2つの展覧会、「平成美術：うたかたと瓦礫（デブリ）1989–2019」（京都市京セラ美術館、2021）と「日本ゼロ年」（水戸芸術館、1999）を取り上げ、そこに通底する男性中心主義やナショナリズム的傾向、震災や戦禍といった「傷」＝被害者性の強調とそれに伴う加害性の隠蔽といった構造の問題点を指摘した。



両展の基盤を成すのが、榎木の「悪い場所」論である。高嶋氏はこの言説に見られる戦争画を起点に据えた歴史観や、「日本対アメリカ」の二項対立、その両者に基づく（主に男性向けの）サブカルチャーの擁護という点を踏まえ、榎木の言説の形成過程で抜け落ちたものへと注意を促す。それはつまり、日本の加害性や「沖縄」という周縁化された第三項、または女性向けサブカルチャーやそれを批判的に考察した作家への評価の欠如である。

こうした観点から高嶋氏は発表の後半で、榎木の言説の影響力が強かった1990年代を中心に、石原友明、鷹野隆大、森村泰昌、木村友紀、西山美なコ、ブブ・ド・ラ・マドレーヌと嶋田美子らの作品に見られる「アプロプリエーション」という手法の共通性に着目し、クィアやジェンダーの視点から分析。榎木史観の盲点に光を当てるとともに、榎木が推進した「シミュレニズム」や「アプロプリエーション」をクィアやジェンダーの視座から読み直す道筋を示唆した。



続けてアニメーション、美術、イラストレーションなどを横断的に論じる塚田優氏が発表を行った。テーマは、1990～2000年代前半の日本のイラストレーション史の再定義だ。

日本が長期の不況へと突入していくこの時期のイラストレーションの動向は、それに先立つ1960年代から80年代までの横尾忠則や日比野克彦らを象徴とする作家主義的な傾向に対して、しばしば「目立つ傾向がない」「無風状態」と語られてきた。しかし塚田氏は、その停滞の印象は、表現の多様化やメディアの変化、コンペの不調といった従来型の評価システムの行き詰まりに過ぎないのではないかと問い、そこに新たな視座を提示した。



例えばそれは、エンライトメント（ヒロ杉山）らによる「デジタル表現」の発展であり、みうらじゅんらの「自己言及＝メタ性」であり、サダヒロカズノリらに見られる「個性への懐疑」や「機能性への回帰」などである。さらにイラストレーションの「情報化」が進んだこの時代は、ハローキティの幅広い世代を対象にした商品展開や、久保誠二郎や坂崎千春らの仕事のように、「キャラクター」がメディアやプロダクトを横断して活用され始めた時期でもある。塚田氏はその一連を踏まえ、この時代には作家主義とは異なる多様な実践があったとし、それを捉えてこそ日本のイラストレーション史が描けると指摘した。



次に、南島興氏が発表を行った。横浜美術館学芸員の南島氏は、個人としても美術館コレクション展のレビューサイト「これぽーと」や、建築家・坂口恭平との対話をまとめた書籍『坂口恭平の心学校』（晶文社、2023）など多様なメディアで発信を行う。また、2021年に始めた月1回の配信「アート・ジャーナリズムの夜」では、同時代シーンへの時評を展開。その経験から、現在の国内の傾向を「前衛からマネエラ/マネエリスムへ」「脱政治性から新しい制度論へ」「拡張されたフォーマリズム/制度論」などと分析した。



その南島氏が着目するのが、2022年の末に横浜美術館館長の蔵屋美香がある場で1年の総括として語った「幽霊からの脱却」や、自身の配信で参加者が発した「僕が幽霊なんです」という言葉だ。

「幽霊」は2010年代に広く使われたキーワードだが、こうした発言から見えるものは何か？ 南島氏はこれを、瀧口修造のシュルレアリスム論や、勤務先で協働した浦川大志ら若手作家のSNS環境を背景とした分人主義的な作品性、岡崎乾二郎が宇佐美圭司論で語った1960～70年代の離人症的感觉、岡崎が「幽霊」を重視する動機として述べた「センチメント」への抵抗という議論などに接続。「2010年代の終わり」とも捉えられる蔵屋の発言に対し、その「幽霊」の語が意味するものを歴史的な視点で考察した。



2023年に初単著『アートとフェミニズムは誰のもの？』（光文社新書）を上梓した村上由鶴氏は、活動の土台となる写真研究と、勤務先での人権啓発活動について発表を行った。

村上氏は写真研究を、そこに写る対象の分析に限らず、誰もが撮り、撮られ、流通や加工に関わりうる「経験」の総体の言語化と捉える。また、#MeToo運動や身近な出来事からカメラや写真に内包される権力性や暴力性に注目し、「経験としての写真論——触れない暴力あるいは非人間化の装置」というテーマで研究を行ってきた。発表ではこうした写真の性質を示す例として、リベンジポルノや米軍によるアブグレイブ刑務所での虐待写真を取り上げ、写真が性愛や暴力を加速させるメカニズムを丁寧に分析。さらに、ヴィレム・フルッサーの論などにも批判的に言及し、そこから発展する研究の展望を語った。



後半では、専門員として働く東京都人権プラザで企画した飯山由貴「あなたの本当の家を探しに行く」展（2022）に言及。精神障害のある妹と向き合う飯山の制作に、従来の障害学における「医学モデル」と「社会モデル」の二分法を止揚するような「人権モデル」という新たなモデルとの共通性を指摘した。そのうえで、自身が人権啓発施設で働く背景にはアートと社会の距離感や不通さへの問いがあるとし、アートとその「外部」にあるものを架け橋することの重要性を語った。



最後の登壇者全員によるディスカッションでは、4人の発表の共通点として「歴史の（語りへの）問い直し」が指摘されたことを機に、榎木野衣の言説や、写真家・長島有里枝の活動を軸にした1990年代および2010年代後半以降の写真とジェンダーをめぐる状況についての議論が行われた。さらに討議の後半では、アートのプレイヤーの中心性と周縁性、批評のチャンネルの多様化、論壇時評的なものの必要性など、言論空間そのもののあり方も焦点に。この連続レクチャーシリーズに登壇した10名がそれぞれ個別に活動をするだけでなく、それらを俯瞰的にまなざす視点や場が必要ではないかとの指摘も上がった。

